

大学生の人間関係と進路意識

東京学芸大学 浅野智彦

1 親密圏と公共圏

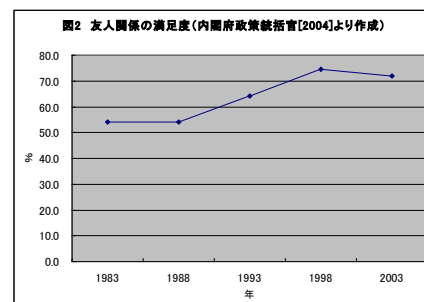
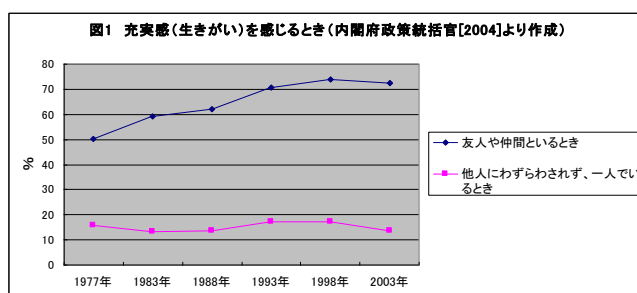
本調査の大きな意義は、大学生のライフを生活と人生という二つの側面にわけて捉え直した上でそれぞれの側面から進路意識にアプローチしている点だ。社会学における若者研究の文脈に引きつけていえばこれは若者のパーソナルネットワークのあり方の二つの側面に対応していると考えることができそうだ。すなわち、ひとつが親密な他者との関係からなる領域(親密圏)、もうひとつが親密ではない(しばしば見知らぬ)他者との関係からなる領域(公共圏)だ。後者は、価値観や好み、生活様式などの共有をあてにできないような他者との交渉を求められる場であると言い換えてもよい。

はじめにこの二つの領域についてこれまでの調査・研究からわかっていることを簡単に紹介したあとで、それをふまえて今回の調査について検討する。

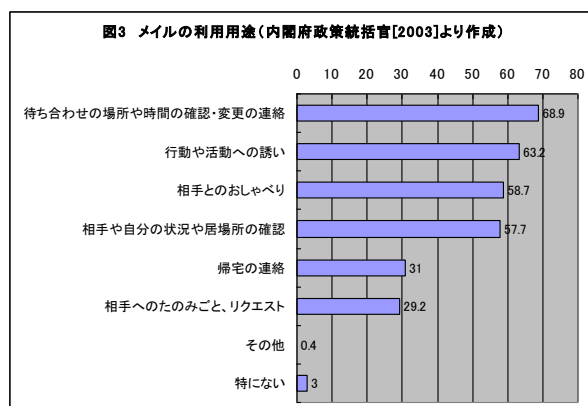
2 親密圏:濃密化と即自化

親密な関係の典型としてここでは友人関係に着目する。

世上よくいわれているのは反対に若者の友人関係は濃密化しているというのが強調しておくべき第一の点だ。内閣府の調査によれば、友人といるときに充実感・生きがいを感じると答えた若者の比率は 1980 年代以降一貫して上昇してきているし、友人関係についての満足度も同様の傾向を示す(図 1、2)。他の調査をみても友人関係が今日の若者にとって生活上の楽しみや喜びの重要な源泉であることがうかがわれる。



そのような若者にとって欠かせないコミュニケーションツールである携帯電話の利用に着目してみると、彼らのコミュニケーションが即自的であることが推測される。これが指摘しておくべき第二の点だ。ここで即自的であるというのは(用件電話に対するおしゃべり電話のように)何らかの目的に対する手段としてなされるのではなく、それを行うこと自体が楽しみであるような営みのことだ。内閣府の調査によれば、携帯電話でやりとりされるメールの相手はふだん会っている友だちであり、その内容の大半は他愛のないおしゃべりのようなものによって占められている(図 3)。



このような濃密化していく即自的コミュニケーションを社会学者は、「つながりの社会性」(北田[2002])、「ネット的コミュニケーション」(鈴木[2007])などよんできた。しかしこのような関係がいったんうまく行かなくなると、その濃密性と即自性とはとたんに息苦しさの源泉となる。これを土井隆義は「友だち地獄」(土井[2008])と表現した。

3 公共圏:政治的シティズンシップと経済的シティズンシップ

友人と呼び得るような範囲を越えて取り結ばれる人間関係は、しばしばあてにできる共通前提をもたない他者とのつきあいを要求する。そのようなつきあいの比率は人間関係の範囲が広がるほど大きくなるだろう。

その種の広がりを持った関係(公共圏)が政治的シティズンシップの涵養にとって重要な意味を持つだろうというのが紹介しておくべき第一の知見である。このような研究の典型が社会関係資本論と呼ばれるものであり、そこにおいて強調されるのは二次的結社(趣味のサークル、ボランティア活動など)への参加だ。このような結社に参加することによって異なる他者への信頼が育成されると同時に、平等な立場で社会をつくっていくための作法が学習される(ただしその効果がどの程度のものであるのかについては議論の余地がある)。

第二に、このような公共圏へのアクセスが教育システムから労働市場への移行過程をサポートするものであり、逆にそのようなアクセスの欠如は社会経済的な地位達成に否定的な影響をおよぼす。その理由としては以下のようなものが挙げられる。

- 相談相手の範囲を狭めることで情報が入りにくくなる。
- 身近に多様なロールモデルがなく、階層移動への動機付けの調達が難しい。
- 狭い範囲の強い紐帯に依存することでそこから抜け出せなくなる。

以下に示すのは、労働政策研究・研修機構による高校生調査のデータを堀有喜衣が分析したものだ(表1)。被説明変数は高校生の進路(正規雇用か無業者か)であり、この表からは相談相手がいない場合に無業者になりやすいことが見て取られる。

B	
男性ダミー	0.45 **
普通科ダミー	-0.99 **
バイトダミー	0.03 n.s.
部活ダミー	0.69 **
欠席ダミー	0.97 **
成績ダミー	0.79 **
相談相手ダミー	0.48 **
偏差値	0 n.s.
定数	-1.38 *
Cox & Snell R square	0.18 **

表1 進路決定を従属変数としたロジスティック回帰分析(堀[2006]より作成)

4 大学生調査の結果を読む

以上のことをふまえて、今回の大学生調査において親密な関係と公共的な関係とが進路意識にどのような影響をもっているのかごく簡単にではあるがみてみよう。すなわち、被説明変数と説明変数を以下のように設定して重回帰分析を行う。

被説明変数として Q13 の将来設計に関わる項目から合成された変数を用いる。この得点が高いほど将来について積極的に設計していこうとする態度をもっていることになる。説明変数としては、

- 親密な関係に関わる変数:友人関係を重視する度合い、友人つきあいに費やす時間、親の関与
- 公共的な関係に関わる変数:ボランティア、インターンシップの経験
- 大学での教育:キャリア科目、キャリア講座の受講
- コントロール変数:学年、性別

医学系・薬学系6年制大学に在籍する学生を除いて重回帰分析を行った結果を表2に示す。ここから読み取られるのは、友人関係が将来設計にプラスの影響をもっていること、ボランティアが特に効果をもたないことだ。大学生の場合、友人関係を重視することは狭い親密圏に閉じこもることを必ずしも意味しておらず、むしろ移行過程にとって有利なネットワークを維持・拡張することを含んでいるのかもしれない。逆にボランティアは、そもそも参加者が少ないこともあって、進路意識に影響をもつようなネットワークを提供してはいないようだ。

	標準化係数 β	有意確率
(定数)		0.000
あなたは大学何年生(何回生)ですか	0.00	0.975
あなたの性別をお知らせください	-0.04	0.057
大学に友人関係を求める度合い(q21-5の逆転総和)	0.13	0.000
友だちつきあいに費やす時間(q5.4-7の総和)	0.09	0.001
親の関与(q22.1の逆転)	0.00	0.918
ボランティア参加経験(q9.1.2の逆転)	0.04	0.078
インターンシップ経験(q10.1.2の逆転)	0.09	0.000
キャリア科目受講(q16.1の逆転)	0.09	0.000
キャリア講座受講(q17.1の逆転)	-0.03	0.227
調整済み R2 乗		0.06

表2 将来設計とネットワーク
従属変数: 将来設計(q13の一部逆転総和)

【引用文献】

- 土井隆義、2008、『友だち地獄』、ちくま新書
- 樋口明彦、2006、「社会的ネットワークとフリーター・ニート」、太郎丸博編、『フリーターとニートの社会学』、世界思想社
- 堀有喜衣、2004、「無業の若者のソーシャル・ネットワークの実態と支援の課題」、『日本労働研究雑誌』533号
- 堀有喜衣、2006、「若者のソーシャル・ネットワークの構造と機能」、『自治体学研究』92号
- 北田暁大、2002、『広告都市・東京』、廣済堂出版
- 久木元真吾、2007、「広がらない世界 ——若者の相談ネットワーク・就業・意識」、堀有喜衣編、『フリーターに滞留する若者たち』、勁草書房
- 内閣府政策統括官編、2003、『情報化社会と青少年』
- 内閣府政策統括官編、2004、『世界の青年との比較からみた日本の青年』
- 鈴木謙介、2007、『ウェブ社会の思想』、NHK出版
- 内田龍史、2005、「強い紐帯の弱さと強さ」、部落解放・人権研究所編、『排除される若者たち』、解放出版社
- 内田龍史、2008、「フリーター選択と社会的ネットワーク」、『理論と方法』22-2